

がまだ十分に説明できないものであることを考えてみる必要がある。実験室内での細胞レベル以下の基礎的研究は世界のどこでも行うことができるが、自然の複雑な条件下での生物には地域的な特殊性が加ってくる。欧米に比べ、日本でも長野県は複雑な環境と豊富な植物に恵まれており、これを研究に生かしたならば多くの興味深い問題を見出すことができ、他の追従を許さない独自の生物学的研究を進展させることができる。材料をとりよせて外国の研究の真似をしたり、後を追いかけるような仕事は避けるように心がけて欲しいものである。

生物学には生物の多様性、高等生物の複雑な構造、環境に対する適応、実験のできない系統や進化の問題、生物間の微妙な相互関係や調和など、他の学科とは異なり誠に興味が有り、しかもまだ未解決な部分の多い重要な基礎的問題が実に沢山ある。しかし近年中等学校の理科や高校の生物の教科書ではこれら重要な生物学の基礎的事項が軽く扱われ、逆に化学でも教えないような難解な化学的知識が生物で要求されていたりするのは遺憾なことで、各方面から強い批判がでている。これでは生物に興味をもち将来生物学を専攻

したいという若い人々の意欲を、促進するよりは逆にそぐ結果になってしまう。最近大学では植物学の基礎的分野の研究を希望する学生が増える傾向にあることを考え、その点を十分に配慮した生物教育が望まれる。特に教育県として長い歴史を誇る長野県で、生物学を教える立場にある方々が率先して、大局を見誤ることなく植物学全体が健全な発展をするように後進の指導にあたられることを切望する。

長野県植物の研究の歴史も古いので、近年は県の植物総目録や地方植物誌も幾つか出版された。私自身も軽井沢附近の高等植物を観察し初めて50年余になり、一応「軽井沢の植物」(1974)をまとめたが、まだ毎年訂正や追加を行うことが必要な状態である。欧米とちがいで、長野県のような複雑で豊富なフロラを近代的手段で研究しつくすにはまだまだ長い年月がかかるであろう。長野県植物研究会の会員の方々は勿論、関心のある多くの研究者が広く力を合わせて、長野県フロラの解明に一層の努力をされると共に、更にこれを資料とした独自の植物学的研究が、日本は勿論世界的に発展してゆくことを心から願っている。

(東京大学名誉教授)

## しかくだけ (しほうちく)

大 井 次 三 郎

### J. Ohwi: A note on *Tetragonocalamus quadrangularis*

昨年スミソニアンのウォーカー博士から氏の新著「沖縄植物誌」を頂いた。琉球列島の植物は初島住彦博士の琉球植物誌があって、同地方の自生植物は余す所がないが、ウ氏の著作は西洋の分類学者の眼で見たもので、近隣の地域の植物ともよく比較しているのが目立ち、私たちに大変有益であり、また同地で植えられている栽培植物の命名にも教えられるところが多い。

もうかれこれ十年程になるかも知れない。以前私がまだ科学博物館に勤めていたころのこと、一度ウ氏が訪れてこれ、博士のこの植物誌のうちの竹笹類の部分を私に分担するようにすすめられたことがあった。イネ科とはいっても私のほとんど調べたことのない難解な類でもあり、またスミソアンには竹笹の専門家のマックリュア博士もおられたことでもあって、びっくりしてお断りしたが、英語の不得手の私はとうとう引受けることになってしまった。ウ氏の採集品を拝借すると同時に、那覇在住の外間現誠氏の援助をあおぎ、泥縄式ではあったが標本によって出来るかぎり調

べるとともに、現地の方々にもお願いして、可能なかぎりの知識をあつめて、沖縄島とそれ以西の竹笹をまとめ上げたのだが、何分にも付焼刃的な知識しかもないので、不十分な点が多く、反って短いけれども同所に記されたマ博士のノートの方が重要であることが多い。

日本産の初期のタイプ標本の多くは、西洋各地の大きな標本館におさめられていて、簡単には研究し難く、本式に日本で標本を蓄積しはじめたのも明治の初年からで、その後日本各地に多数の採集研究家もでて、年々資料も集まってはいるが、ともに高だか百年に達せず、比較材料としての外国の資料も貧弱で、しかも全国の数ヶ所に分散して所蔵されているにすぎない。分類学の発祥地として欧州からはもちろん、アメリカなどの大きくてやや隔離された地域にくらべても、日本はなお格段に新しい。これら地方からの後発のハンデを負っているほかにアジアの縁辺にあって、比較すべき近隣地方の材料もまだ満足にあつまらず、腊葉標本による研究から一步進めるのはまだ容易なことではな

い。欧米なみのレベルになるにはまだまだ、遠い道を乏しい予算と、少数の人とで歩かねばならない。ウ氏の著書を拝見してほんとにその感を深くする。けれども、これは、裏がえしていえば今日の日本の分類学を悲観するにはおよばないことで、なぜならば、まだまだ残された問題は欧米のそれよりずっと面白いことが多いといえるのではあるまいか。

氏の沖縄植物誌の180頁にはシカクダケ（シホウチク）に関するマ氏の短いノートがのっていて、この地域にはシカクダケが観賞用にまれに栽培されている。日本ではときに *Tetragonocalamus quadrangularis* (Fenzi) Nakai が用いられるが、その属名は不要名であって、属のタイプの *T. angulatus* (Munro) Nakai すなわち台湾の *Bambusa angulata* Munro はマ氏によればやはり *Bambusa* の一種にまちがいが無いものだという。この文献は現在、生憎手許にないのではあるが、シカクダケ属の原記載に用いられた中井

先生の花部の記述は「外人採取の標本によれば」とあるのみである。またこの竹には *Chimonobambusa quadrangularis* (Fenzi) Makino の名もあるが、この属のタイプはカンチクであるとされている。これは小さい竹で、その茎は丈が低く、平滑で断面が円く、竹の皮は膜質で、腐り易く、脱落しない。シカクダケではやはり竹の子が秋にでるが、竹の皮はやや厚くて早く脱落する中形の竹で、茎はその名のようににぶい四稜があって、表面は暗緑色、乾いてやや褐色をおび、ざらざらして光沢はない。節は長いいぼの様な突起が下に曲って環状にならんで、材はもろい。そして何にもまして、この竹はまだ花がでないことで、属の特質がよく表われる花序がでたならば、果して何に近いものになるかがわかってくるであろう。私は花の咲くのを楽しみながら待っている。

(国立科学博物館名誉館員)

## 日本産植物数種の学名考証

北 川 政 夫

M. Kitagawa: Some inquiries about the scientific names of the Japanese plants

近年の植物分類学方面の文献やフロラに順次目を通しての内に、植物学名の先行名や命名者の扱いについて、さまざまな改正が行なわれているのに気がついた。そこで、すでに承知されている方もあるかと思うが、一応日本に関係したものを選び、次に紹介して諸氏の参考に供したい。

### 1. ヒオウギ

ヒオウギ属はアヤメ科では特殊なもので、わずかに2種を含むのみである。ヒオウギの命名者はレマン Léman となっているが、これは誤りでドゥ・カンドル De Candolle が真の命名者であるという。

### 2. ヨシ (広義)

ヨシの学名は今まで *Phragmites communis* Trin. が用いられて来たが、1968年にクレイトン W.D. Clayton は "Taxon" 17巻2号で、オーストラリア産の *Arundo australis* Cavanilles (1799) がこれと全く同一種であることを認め、*Phragmites australis* (Cavanilles) Trin. ex Steudel を採用している。

### 3. ヒロハトンボソウ (チョウセンコトソウ)

この類の属名は *Tulotis* であるが、本種の基本名 *Orchis fuscescens* Linnaeus を *Tulotis* に移した場合、先行名の *Tulotis fuscescens* Rafinesque ex Jackson (1895) とかち合うので、原寛氏は *Tulotis asiatica* Hara と新名を用意した。しかし、ソ連邦の

クゼルニアスコフスカ Czerniaskowska はラフィネスクのつけた名は裸名であることを指摘し、*Tulotis fuscescens* (Linnaeus) Czerniaskowska と改名している。

### 4. クサコアカソ

中国の学者によれば、*Boehmeria paraspicata* Nakai つまりクサコアカソはチャールズ・ヘンリー・ライト C. H. Wright が1899年に発表した *Boehmeria gracilis* C. H. Wright と同じ種であるという。

### 5. ハマエンドウ

従来この種の学名は *Lathyrus maritimus* (Linnaeus) Bigelow (1824) とされているが、アメリカの学者によればビゲロウの与えた名は *Pisum maritimum* Linnaeus を引用せず、ハマエンドウとは別の種であるとしている。従って、これの正しい学名は *Lathyrus japonicus* Willdenow となる。

### 6. ヒロハクハラ

この種の命名者は単にエイトン Aiton となっているが、正しくは Solander in Aiton とすべきで、ソーランダーが本当の命名者となる。

### 7. アゼナ

本種の原種名 *Lindernia pyxidaria* Linnaeus (1771) は無効名となり、*Anagalloides procumbens* Krocke (1790) が有効名となっている。これを *Lindernia* に